

仏教音楽 人物伝

- 9 -

福本 康之

大栗 裕 (1918~ 1982)

Ohguri Hiroshi

演奏家から作曲家に転身し
ベルリン・フィルで世界へ

積極的に仏教の響きを作品化

による幻想曲』で、特に『大阪〜』は、日本を彷彿させる響きが高く評価され、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏によって、大栗の名は海を越えて知られるところとなりました。

日本的なものを作曲の柱とすることに自信を得た大栗が、次に作曲の素材として選んだのは、仏教の音声でした。40代の大栗は、京都の六斎

や、本願寺派の「正信偈和讃六首引き」のおつとめを引用したオペレッタ狂言『悪太郎』など、仏教的な響きを滲せた作品を積極的に発表していきます。

本人の証言こそありませんが、真宗門徒の商人を中心に発展した船場という環境で育った大栗にとって、仏教が奏でる響きは、「自身が生まれ育った日本」の音そのものだったのかもしれない。

そして京都女子大学への着任。仏教の響きに魅せられた作曲家大栗にとって、まさに水を得た魚のように、これ以上ない環境だったといってしまうでしょう。「悲嘆述懐和讃」や『歎異抄』『御文章』を題材とした仏教音楽の大作が生まれています。

仏教が日本人の生活から消えつつあるといわれる現代、大栗の作品を通し、日常にあった仏教の響きに耳を傾けてみてはいかがでしょうか。

(本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室長)

日本的な響きとは何か？

この問いに対し、仏教の音声に答えを求めた日本人がいました。昭和39年から宗門校の京都女子大学で教壇に立った世界的作曲家、大栗裕がその人です。

大正7年、船場（大阪市中央区）の商家に生まれた大栗は、家業を継ぐべく天王寺商業学校に進学します。しかし同校でのホルンとの出会いに

よって、音楽家を志望することになりました。卒業後はホルン奏者として音楽家人

生を歩み始めますが、在学中から独学で作曲も行っており、いつか作曲家として…という夢も抱いていたようです。

作曲家としての出世作は、昭和30年代後半に書いたオペラ『赤い陣羽織』と管弦楽曲の『大阪俗謡



京都女子大学で学生を相手に指揮を執る大栗裕＝写真：大栗裕記念会提供

念仏を取材して書いた交響管弦楽のための組曲『雲水讃』